

No.維持管理-1-2	気温・WBGT（暑さ指数）などのモニタリングの実施		
-------------	---------------------------	--	--

技術の目的

暑熱対策を実施した緑地などにおいて、モニタリングにより効果測定することで維持管理の参考にするとともに、暑熱対策事業のPRを図る。

導入する局面	創出	維持管理	利活用
適用空間	水域		陸域

技術の内容・事例

■技術の内容

モニタリングには以下のような手法が一般的に行われており、計測と同時に空間的な人の滞留状況などと併せて把握することで利用への影響などを同時にモニタリングする事例もある。

- サーモカメラなどを使用した地表面・構造物表面温度の実測
 - 視覚的・面的に緑化した箇所の効果が把握しやすいことから、様々な場所でモニタリングに活用されている。

<p>パークスガーデン 周辺市街地との表面温度差 約15~20℃ サーモグラフィ画像 (2011年8月3日 12:00)</p>	
<p>人工地盤上の緑地（公開空地）と市街地の温度差を面的に比較する^{出典1}</p>	<p>市街地の未利用空間を緑被率30%に緑化し暑熱環境改善効果を計測^{出典1}</p>

- 体感温度の実測
 - WBGT（暑さ指数）、SET*（標準有効温度）などの指標に基づいた実測を行い、人の体感により近い暑熱環境の状況を把握する。
 - 取組を実施していない場所との比較、または取組を実施する前との比較などで効果が把握できるが、局所的な環境に影響されやすいため計測点の選定には留意する必要がある。

<p>図 2.6 体感温度 SET*と標準化利用者数^{注)}の関係</p> <p>注) ある場所・時間帯における平均利用者数に対する比率 (H28年度環境省検証事業 東京ビッグサイト前海上公園及び大阪ビジネスパーク前コミュニティスペースでの利用状況調査結果より)</p>	<p>対策後</p>
<p>公園内のベンチの利用と体感温度との関係を調査した結果、夏に対策によって体感温度が低下することで、ベンチの利用が増加する傾向を把握する^{出典1}</p>	

